Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-07

A Study of J.R.R. Tolkien's Works : Blindness Caused by Obsessiveness

Fujiwara, Noriko

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2014-03-25

(Date of Publication)
2015-03-01

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第6035号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006035

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

A Study of J. R. R. Tolkien's Works: Blindness Caused by Obsessiveness
（J. R. R. トールキンの作品研究――執着が引き起こす盲目性）

氏　　名　：　藤　原　　典　子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）菱川英一　教授
（副）山本秀行　教授
（副）長野順子　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

J. R. R. トールキンの作品研究――執着が引き起こす盲目性

藤原　典子

本論は、イギリスの作家 J. R. R. トールキン (Tolkien, 1892-1973) の作品に見られる、執着が引き起こす盲目性を問題として論じる。トールキンの作品には、一つの事柄あるいは対象に執着する人々が多く描き出されていることから、執着に関わる問題は、彼の作品における重要なテーマの一つであることが窺われる。そこで本論では、これまであまり扱われてこなかった彼の中編・短編作品を含めた複数の作品を取り上げ、トールキンが人々の執着を如何に捉え、作品に描き出しているのかを分析する。この分析を通して、執着が我々の視野を狭め、物事の本質を見失わせてしまう危険なものであることを明らかにし、さらに、我々が曇りのない視野を回復し、物事をより深く理解するためには、あらゆる執着を放棄することが必要であるとする、トールキンの主張を読み取る。

1 章では、我々が物事を誤って認識してしまう原因について考察し、一方向的な見方に執着することが物事の正しい理解を阻むことを明らかにしたうえで、我々の誤った認識を改め、視野を回復してくれるファンタジーの有用性について論じた。物事についての誤解や事実の歪曲は、我々がひとつの見方に固執し、それ以外の観点から見ることを止めてしまうことによって起こる。物事をより深く理解するためには、自己中心的な認識に執着することを止め、多方面から対象を見つめ直すことが必要である。そして、これを可能にするのがファンタジーである。ファンタジーは、想像力によって現実世界にあるものを異化し、日常性を取り去り、我々がこれまでは気付かなかった側面に新たな光を当ててくれるものである。ファンタジー世界は、我々を現実世界から一旦引き離し、未知の世界を体験させることによって、再び我々が現実世界に戻った時に、新たな視点からあらゆる物事を見ることを可能にしてくれる。このように、ファンタジーは、我々が物事を認識し直すための曇りのない視野を取り戻させ、ぼやけてしまった視界を取り除いてくれるものである。

2 章では、*Smith of Wootton Major* (1967) における、妖精の国に対する登場人物たちの反応に注目することで、我々が曇りのない視野を取り戻すためには、物事の本質を理解しようとする積極的な意志を持つことが重要であることを読み取った。1 章で述べたように、ファンタジーは、あらゆる物事に対する新鮮な見方を我々に提示してくれるものであるが、我々が自分の考えに執着し、物事を注意深く見ようとする意志を持たなければ、ファンタ

ジーの効果は発揮されない。自分の考えに執着する傲慢な人物ノークス (Nokes) は、自分にとって馴染みのない物事や考え方を決して受け入れようとしないため、妖精の国の片鱗を実際に目にした時も、その国の存在を全く信じようとしない。他方、新しい物事を受け入れる謙虚さを備えた鍛冶屋 (Smith) は、自分の考えに執着せず、妖精の国の存在も素直に受け入れ、これによって、自分の視野をさらに広げることに成功する。この二人の描写から明らかなように、未知の事柄を受け入れ、新たな視点から物事を見つめようとする柔軟かつ積極的な意志を持つことが、我々の視野の回復において必要であると分かる。

3 章では、*The Hobbit, or There and Back Again* (1934) にみられる、宝への執着とドラゴンの表象に注目し、宝に執着する人々の貪欲な性格とドラゴンの残忍性とが関連付けて描かれていることを明らかにした。トールキンは、本作品に登場する竜スマウグ (Smaug) を、宝に対する強い所有欲を持った悪竜として登場させ、執着心や残忍性、攻撃的な性格を強調して描き出している。そして、スマウグのこれらの特徴は、同じく宝に対して執着心を持つドワーフのトーリン (Thorin) や怪物のゴラム (Gollum) といったキャラクターに類比して描き出される。トールキンは、過度の所有欲が人々の心を歪め、ドラゴンのように邪悪で残忍な性格へと変えてしまうことを強調し、過剰な執着心に囚われた人物たちをドラゴンのイメージで描くことにより、執着が如何に醜く危険なものであるかを表現している。また、トールキンは本作品において執着の危険性を示すのみならず、トーリンが宝の所有権を放棄する過程を通して、執着を捨て去ることが、自己中心的な欲望や道徳的な過ちに気付かせ、豊かな人間性の回復に導くということも同時に伝えている。

4 章では、*Farmer Giles of Ham* (1949) に登場する騎士たちの振舞いに注目し、騎士の伝統や習慣といった表面的な事柄への過度の執着が、騎士本来の役目をぼやけさせるということを明らかにした。トールキンは、彼の学術的詩劇作品 "The Homecoming of Beorhtnoth Beorhthelm's Son" (1953) において、名誉を得るためだけに自らの命を危険にさらすことは、騎士や英雄の本来の目的を履き違えた、間違った英雄的行為であると批判をしているが、竜退治を描いた *Farmer Giles of Ham* においても、彼は過剰な英雄行為について同様の非難をしている。彼は、王宮の騎士たちが、自分たちの装いや騎士の伝統行事ばかりに気を取られ、騎士が本来果たすべき国や人々を守るという役割を蔑にしている様子をユーモラスに描きつつ、自分のことを優先した彼らの振舞いは、英雄的でも何でもなく、騎士本来の目的を見失った無意味な行為でしかないと非難する。そして、騎士の慣習とは全く無縁の農夫ジャイルズ (Giles) が、見事に竜を降参させ、王国に平和をもたらす過程を描くことにより、騎士が本来果たすべき役割は人々の平和の維持であり、自分のためではなく他者のために行動することであると訴えている。

5 章と 6 章は、*The Lord of the Rings* (1954-55) にみられる執着の問題を取り上げた。5 章では、4 章で論じた名誉への執着と英雄性についてさらに議論を進め、英雄の本質について論じた。英雄の本質は、他者のために危険を顧みず行動する勇敢さにあるといえるが、人々はしばしば英雄の発揮する超人的な力や武勇などの表面的な強さに気を取られ、英雄の本質が、眼には見えない道徳的な信念に基づいた行動にあることを忘れてしまう。そこでトールキンは、内面外面共に完璧な強さを備えた理想的な英雄としてアラゴルン (Aragorn) を描き出す一方で、肉体的な強靭さを持たず、我々と等身大の能力しか持たないホビットたちが、自分たちの名誉を顧みず、ただ道徳的な信念によって行動し、世界の平和を取り戻す偉業を成し遂げる姿を描きだした。これによってトールキンは、英雄の本質が力や名声といった表面的な強さにあるのではなく、道徳的に振舞う賢さと自分の利益を顧みない謙虚さを備えた内面的な強さにあるということを我々に思い出させている。

6 章では、一つの物事への執着が様々な重要な事柄を見失わせるということを、悪の支配者サウロン (Sauron) の描写から読み取り、さらに、そのような執着は誰にでも起こり得ることを明らかにしたうえで、本作品の中心に据えられている指輪破棄の旅が、あらゆる執着を放棄し、曇りのない視野を取り戻すための旅として解釈できることを指摘した。サウロンは、世界征服という欲望に執着するあまり、心の平穏を失い、生きる事自体の喜びを見失っているが、支配欲を持たないフロド (Frodo) もまた、自分の平穏な暮らしに執着し、その平穏が他者の努力によってもたらされてきたことを完全に忘れている。このように、執着とそれが引き起こす盲目性は、様々なレヴェルで誰にでも起こり得る。しかし、フロドは指輪破棄の旅に出て、多くの人と関わり、様々な体験をする中で、内面的な成長を果たし、これまで見失っていた他者との結びつきを理解する。つまり、指輪破棄の旅は、これまで見失っていた様々な事柄を再発見するための旅であり、指輪を棄てるということは、あらゆる執着を捨て去り、世界を見つめ直す新たな視野を手に入れるための行為であるといえる。

以上、各章で論じてきたように、トールキンは、それぞれの作品において、執着が人々の視野を曇らせ、物事の本質を見失わせることを強調して描き出し、一つのものに執着することの無意味さと危険性を明らかにした。そして、各作品の登場人物が日常を離れ、特別な体験を通して執着から解放され、豊かな人間性を手に入れる過程を描くことによって、

トールキンは、あらゆる執着を放棄し、盲目な状態から解放される必要性を我々に訴えかけている。

我々の日常世界には、様々な欲望、嫌悪、絶望、悲しみ、そして不満といったネガティヴな思考が溢れており、我々はこれらの感情に容易に囚われ、世の中における様々な魅力や価値のある物を見失ってしまう。しかし、トールキンのファンタジー作品を読むことで、我々は新たな視点で現実の世界を見つめなおし、世界の魅力を再発見し、物事を大きな視点で捉える事が出来るようになり、ネガティヴな思考に囚われた状態から解放される。トールキンの作品は、我々に一元的な視野の危険性と、あらゆる執着を放棄することの重要性を我々に訴えかけるだけではなく、実際に未知の驚きに溢れた空想世界を我々に体験させることによって、我々に曇りのない多角的な視点を取り戻させ、執着によって引き起こされた盲目の状態から我々を解放してくれるのである、と結んだ。

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	藤原　典子
論 文 題 目	A Study of J. R. R. Tolkien's Works: Blindness Caused by Obsessiveness (J. R. R. トールキンの作品研究――執着が引き起こす盲目性)

要　　旨

本論文は、J. R. R. Tolkien の作品において執着の問題がどのように扱われているかに関し、そのファンタジー論である 'On Fairy-Stories'を理論的基礎として用いて、作品を幅広く研究したものである。従来、彼のファンタジー論について、それとの関わりが殆ど指摘されてこなかった作品にも視野を広げ、それが適用可能であることを示している。

以下、各章の内容を紹介しながら、本論文の主張を検討する。

第１章は 'On Fairy-Stories' （「妖精の国に関わる物語について」）を基礎にすえて、執着とファンタジーに関わる問題を考察している（ここで、Tolkien は 'Fairy' [Faerie] とは「'fairies' がいるところ [realm/state]」と厳密に定義しており、すなわち、この物語とは fairies に関するものではなく、Fairy に関するものであり、したがって、ドラゴンなど、fairies 以外のものも多く含む)。ファンタジーの役目は視点の多様化により事物への固執を捨てさせ曇りなき洞察を与えることにある。その際、現実世界とは違う世界を読者に体験させることにより現実に対する新鮮な視座を与えるという過程を経る。その体験のさせ方において想像力と利他性(=いずれも自己中心性を脱却するヴェクトル)とが重要である。このような過程を経た結果、獲得される新たな認識の地平こそがファンタジーの目指すものである。具体例として *The Lord of the Rings* （『指輪物語』）に登場する怪物 Gollum が取り上げられる。友が美しい指輪を見つけたことを知った Gollum は、それを我が物とすることを欲し、友を殺して奪ってしまう。その事実を正当化するために、自分への誕生日の贈り物であったと想像することにし、その嘘を自分に対してつく。つまり、想像力を濫用してみずからの都合に合わせて真実を歪曲する。これは 'On Fairy-Stories' が説く 'Morbid Delusion' （病的欺瞞）の例である。ここで、みずからの利己的欲望に固執した事例を読者に示していると考えることができる。

第２章は *Smith of Wootton Major* （『星をのんだかじ屋』）を取り上げて、自己の考えへの固執が本質の理解を妨げる問題を考察している。この作品には Nokes と Smith という妖精国に対する態度が対照的な二人の人物が登場する。二人とも妖精国を瞥見するという同じ体験を有しながら、その反応は正反対である。Nokes のほうは自己の固定観念に囚われて、みずからの目で見たものを信じず、妖精国の存在を受け容れない。一方、Smith は未知のものを受け容れる謙虚さがあり、妖精国に関するみずからの誤解を修正し、新たな視野を獲得する。この作品は Tolkien の最後の作品であり、『指輪物語』などで出てくる Middle-earth （中つ国〔仮想世界の名〕）ではなく、ファンタジーの世界そのものを扱う点で特異であり、彼のファンタジー理論を考える上で重要であるにもかかわらず、従来、殆ど論じられてこなかった欠を本論文は補うものである。その意味で Tolkien 研究に寄与する面があると考えられる。

第３章は *The Hobbit, or There and Back Again* （『ホビットの冒険』）を取り上げて、ドラゴンに仮託して表現された（人間の）動物的利己性の問題を考察している。ドラゴンの Smaug は宝に対する強い所有欲を有する、邪悪で残忍なものとして描かれる。それに類比されるのが、同じく宝に対する執着心を抱くドワーフの Thorin や怪物の Gollum である。この類比にくわえて、執着を放棄する Thorin も描き出し、自己中心性を脱却する方向が生み出す豊かさを示唆してもいる。相反する利己と利他のヴェクトルを内包する物語と読み解くことは、この作品に新たな、ダイナミクな視座をもたらすことになると考えられる。

主査記載 氏名・印	菱川　英一

第4章は *Farmer Giles of Ham*（『農夫ジャイルズの冒険』）を取り上げて、自己中心的な騎士でなく利他的な農夫がドラゴンを屈服させ王国に平和をもたらす過程を考察している。Tolkien の他の作品に比べて、ややアレゴリカルな要素を含む異色の作品である。ここで Tolkien の騎士観を掘り下げて捉えるために、その学術的詩劇作品である 'The Homecoming of Beorhtnoth of Beorhthelm's Son'（「ビュルフトエルムの息子ビュルフトノスの帰還」）を比較検討していることが、*Farmer Giles of Ham* という論じられることの少ない作品を取り上げていることとあわせて、本論考の大きな特徴である。この両者をあわせて考察し、騎士の本来の役割は、自分が名誉を得るために命を危険にさらすことではなく、王国の人々の平和を維持するために行動することにあると Tolkien が考えていたと捉える。そのような利他的行動をなし得たのが騎士でなく一介の農夫であると描き出すところに、この作品の面白さがあるとする。

第5章と第6章とは *The Lord of the Rings* にみられる執着の問題を考察している。

第5章では第4章で扱った騎士の英雄性の問題をさらに深め、英雄の本質について論じている。英雄の本質は、肉体の強靭さなどの外面的強さでなく利他的道徳を備えた内面的強さにあると Tolkien が考えていたと捉える。この作品においては、等身大の英雄としてのホビットといかにも理想的な英雄としてのアラゴルンの対比という高度な技巧でその本質を浮かび上がらせていると論じる。どちらも英雄ではあるが、ホビットのほうはアラゴルンのような（肉体的強靭さを含む）完璧な強さを欠いているにもかかわらず、やはり英雄である。そのようなホビットの英雄性を描き出すことによって、この作品はかえって英雄の本質を浮き彫りにしていると論じる。これは、この作品に関する斬新な視点の提示になっている。

第6章は *The Lord of the Rings* の中心に据えられている指輪破棄の旅を考察している。ここでは、指輪破棄を執着の放棄と解釈し、ホビットの Frodo の内面の成長のドラマに着目する。すなわち、この旅は Frodo が、他者との結びつきを理解する中で利他性に目覚め、新たな認識を獲得するまでの旅であると捉えるのである。その対極にあるのが、世界征服という欲望に執着する悪の支配者 Sauron である。こうしてみると、この作品は単純な善悪対立の構造にも見えるが、善の側にいる Frodo にも、実はみずからの平穏な暮らしへの執着があり、その生活を支える他者の努力が当初は見えていなかった。このように、執着がもたらす盲目性が善悪どちらの側にも遍在することを論じる点に、本論考の射程の深さが窺われる。

以上見たように、本論文は Tolkien 研究に新しい寄与を成す論考を含む意欲的論文であると言える。基礎に Tolkien のファンタジー理論を据えて、従来の研究が光を当ててこなかった作品にまで目配りをし、主要な作品について丁寧な考察を重ねた論文であると評価できる。想像力と利他性というファンタジーが有効に働くための力学に着目したものの、そのメカニズムについての考察はやや深みに欠けるきらいはあるが、全体として、論旨は明確であり、優れたものであることは疑いない。

以上に鑑みて、本審査委員会は全員一致で論文提出者、藤原典子氏が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	菱川 英一	副査	准教授	芦津 かおり
副査	教授	長野 順子	副査	准教授	奥村 沙矢香
副査	教授	山本 秀行			